

県中教研 保健体育部会だより

第 41 号

発行日 令和8年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 川口 雅也
題 字 金山 泰仁 先生

運動・スポーツに関する学びの本質的意義

主任指導主事 秋盛 勇

スポーツ基本法の一部を改正する法律が、令和7年6月に参議院本会議で可決、成立した。基本理念等において、「人種、性別、年齢、障害の有無等にかかわらず、スポーツに親しむことのできる機会の確保」が盛り込まれた。こうした状況を踏まえ、学校における運動・スポーツに関する学びの本質的な意義を今一度検討し、明確化する必要がある。

学校で保健体育等を学ぶ「本質的意義」については、以下の2点が挙げられる。

- ①保健体育は、身体を媒介に運動学習を行うという独特の学習方法を有し、「運動・スポーツの価値」を体感できるとともに、非認知能力を含む身体的・社会的・情意的スキルの育成に大きな力を発揮する強みがあること
- ②全ての子供に運動・スポーツとの多様な関わりを保証するとともに、人と関わりながら自分らしく健康で生き生きとした人生を送る基盤づくりに貢献する「知・徳・体」のバランスを支える不可欠な学びであること

この本質的意義を実感できるようにするために保健体育科の授業において大切にしたい視点が3点ある。

- ①「運動への苦手意識」をつくらない・もたせないこと
- ②運動能力を周囲の他者と比較する必要がないことを学べるカリキュラムを構築すること
- ③誰も取り残さない体育を実現すること

上記のような授業を目指すには、教師は「教える」ことから脱却し、生徒自身が自ら考え、学ぶためのアドバイザーやコーディネーター的な役割を担うことが大切である。未来を築く子供の育成のために日々変化する情勢等を的確に捉え、授業に生かしていきましょう。

(西部教育事務所)

VUCA の時代を生き抜くために

部長 川口 雅也

令和7年度は、「体育や保健の課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフの実現を目指そうとする生徒を育てるための学習指導はどうあればよいか。」を研究主題とし、特に「ICTの活用」と「共生の視点に基づく授業づくり」に重点をおき、研究を進めてきました。

「ICTの活用」の視点では、1人1台端末で自己や仲間の考えを整理したり共有したりすること、それらをまとめたり振り返ったりすること、さらに評価するために有効な活用方法について、授業実践を通して明らかにしました。

また、「共生の視点に基づく授業づくり」では、男女共習による話し合い活動や協働学習を中心とした授業実践を通して、仲間と共に主体的に学習するための有効な手立てについて明らかにしました。

生徒たちは、これからVUCAといわれる先行きが不透明で予測困難な時代を生きると言われています。私たち保健体育科教員に求められるのは、そのような時代を生き抜くために必要な力を、保健体育科の学習を通して生徒たちが身に付けられるようにすることです。そのために、これまで先輩方が築き上げてこられた成果を大切にしつつ、私たち教員が自ら学び続けアップデートし、時代の変化に柔軟に対応しながら授業改善に取り組む大切さを実感しています。

保健体育科の学習を通して、生涯にわたって心身の健康を保持し豊かなスポーツライフを実現し、主体的に共生社会を構成しようとする生徒の育成を目指して、さらなる研究を進めていきます。

(南・福野中)

第69回 研究大会の取組

新 川 地 区

(黒・明峰中)

3年 体育理論 文化としてのスポーツ

「人々を結び付けるスポーツ」

指導者 海口 碧大

「多様な人々がスポーツを楽しむためには何が必要だろうか」を学習課題に、3学年の保健の授業が提案された。アンケートフォームやプレゼンテーションソフト等に入力した意見はクラス全体で共有できるようにし、各班の活動の様子がリアルタイムで分かるようにした。生徒は他の班の意見を参考にして考えることができるため、話し合いをより活性化させ、深い学びにつなげていった。また、ICTを用いて情報を即時共有することで、授業を効率的に進めた。結果、各活動に十分な時間が確保でき、さらに学びが深まった。

部会協議

では、今回の提案授業を参考に、保健体育の



授業における効果的なICTの活用方法について、各校での実践例を挙げるなど、積極的に意見交換が行われた。

鵜飼雅信指導主事（東部教育事務所）からは、「ICTのよさは、他者の意見を自分の端末を通して学ぶことができるところにある。個人の意見を学級で共有することで、より深い学びを実現することができる。」などの助言をいただいた。

衛藤 千央（魚・東部中）

富 山 地 区

(富・奥田中)

1年 保健「欲求やストレスへの対処と心の健康」

指導者 嘉藤ゆきみ

「ストレスって何？（対処の引き出しを増やそう!）」を学習課題として、1年生の保健の授業が提案された。今回の授業は、これまでの一斉授業の学習形態ではなく、自由進度学習で行われた。

授業では、序盤に、事前に実施したアンケート結果を共有したことで、生徒は、ストレスに対する不安や悩みは、自分だけでなく多くの人が感じていることであると知り、抵抗感なくストレスについての学習に取り組むことができた。その後、生徒は、「誰と」「どこで」「どの資料（書籍、インターネット等）」等、自分の決めた学び方で、課題解決に向けて学習を進めた。端末上の学習進度表を活用し、学習の進度や参考となる取組が共有され、進度の速い人に聞きに行ったり、他の人の取組を参考にしたりするなど、学び方を自分で調整するための工夫がなされていた。終盤では、学習の振り返りとまとめを分けて考えさせることで、学び方に関する振り返りを意識させる手立てとなっていた。自由進度学習を通し、学び方を調整しながら、学習課題を解決するといった授業が展開され、今後の我々の授業改善に新たな視点を与えてくれる提案であった。

協議会では、自由進度学習について、建設的な意見交換が活発に行われ、有意義な時間となった。



石倉博美主任指導

主事（東部教育事務所）より、「保健分野は、生徒が既に知っている内容が多いところに難しさがある。生徒が自分の体験を話したり、記入したりするなど、健康についての課題を発見する学習過程を位置付けることで、自らの課題への意識を高めて学習することができる。」「生徒が自分の思いや考えを基に追究する過程を保障しつつ、教師が状況に応じて学習内容を確認する必要がある。」などの助言をいただいた。

高瀬 優子（富・芝園中）

第69回 研究大会の取組

高岡地区

(高・伏木中)

1年 体づくり運動

指導者 苅部 優希

「ねらいに応じて誰もが楽しめる運動を見付け、伝えよう」を学習課題として、1年生の体づくり運動の授業が提案された。本単元では、最終的なゴールを「運動プログラム」の作成とし、近隣の小学校に提案することとした。本時では、グループごとにそれに向けて考えた運動の計画を発表し合った。よりよいプログラムを練り上げる場面では、授業者のきめ細やかな声かけや、生徒が主体的に取り組む姿が多く見られた。運動を考える際にも、ヒントとなる情報が提示されており、生徒が自ら考えるための一助となっていた。ICTを活用した相互評価では、同時に複数の意見を共有する姿が見られた。また、相互評価についても視点が提示されていたことで、生徒が視点に沿って助言し合うことができた。



大道隆也指導主事(西部教育事務所)からは、「小学校訪問といったゴールまでの見通しがあったことで、生徒が課題を自分のこととして捉えることができていた。また、共生の視点を踏まえ、様々な違いを超えて取り組める工夫があり、男女が協力して取り組む姿が見られた。ICTを活用した相互評価は、考えを他者と共有することに有効であり、データを積み重ねていくことで次年度以降も活用できる可能性がある」と助言いただいた。また、改善点として、「授業全体としての運動量を確保すること」や「指導と評価を一体化させ、生徒の振り返りに何を記述させたいのか、ねらいを明確にすること」を挙げられ、「保健体育科の指導過程について、体育を学ぶ意義を我々教師自身が学び、深めていくことが重要である」と提案された。

宮腰 太輔 (射・新湊中)

砺波地区

(小・津沢中)

3年 保健「健康と環境」

指導者 前田 弘美

「現代社会における廃棄物の処理問題について、10年後の社会を想像して、私たちが取り組みばよいことは何だろう」を学習課題に授業が提案された。

授業の最初に、前時で学習した「給食で出る牛乳パックゴミの未来」の映像と、具体的な処理方法を示した図を提示することで、生徒の廃棄物処理に対する関心を高めることができた。また、生徒が廃棄物処理やSDGsについて発表した後に、グループで意見交換や質問タイムを設定したことで、より考えを広めたり深めたりすることができた。授業では、「企業の取組を紹介し、燃やしてしまうゴミを減らすためにリサイクルよりリデュースに力を入れていること」「企業だけではなく市や地域団体も協力して環境保持に努めていること」を確認した。



部会協議では、研究主題の視点を基に話し合い、生徒の課題意識を高める手立てや、生徒が自己調整しながら学習を進めることができるようにする手立てについて、活発に意見交換を行った。秋盛勇主任指導主事(西部教育事務所)からは、「導入において前時の様子を取り上げることで、生徒の課題意識を高めることができたこと」「知識を獲得した上で、健康と環境の関わりについて理解を深めることができたこと」等を教えていただいた。また「どうしてという言葉を使いながら、疑問の視点をもって学ぶことの大切さ」「友達の見聞を聞いて自分の考えを修正し、考えを深めることができる授業づくりや教師の問いかけの大切さ」等について助言をいただいた。

松本 大輔 (小・石動中)

研 修 報 告

報告者 富山大学教育学部附属中学校
教諭 松田 匠

現行の学習指導要領が施行され、まだ折り返し地点にも関わらず、次期学習指導要領に向けての論点整理が示され、なおかつ、評価の在り方等が大きく変遷を迎える昨今、私が、ここ数年研修を重ね得た授業実践での学びについて述べていきたい。

〈令和5年度横浜国立大学附属横浜中学校の実践〉

研究主題を「これからの『学校』のあるべき姿を追究するIV～〔思考力、判断力、表現力等〕を育成する授業づくり～」とし、総合的な学習の時間の総括である発表会を、生徒が各教科で学んだことを成果として示す最大のパフォーマンス課題として位置付けている。保健体育科での学びが、総合的な学習の時間にどのように発揮できるかについて着眼し、授業を参観した。

○単元：第1学年/走り幅跳び 全8時間

○単元テーマ：今ある力を生かしてより遠くに跳ぼう

○本時：仲間と探究してきたことを生かして、より遠くに跳ぼう

課題発見・把握（1、2時間目）
・動画撮影 ・参考動画比較 ・課題発見 ・解決への練習計画作成
課題の追究（3～7時間目）参観は5時間目
・助走、踏切、空中動作、着地の動きの理解 ・課題に適した練習の検討 ・途中成果発表
まとめ（8時間目）
・プレゼンテーションソフトに学習を整理し発表 ・1番よい動きを分析し発表

今年度の本会でもテーマに挙げていた「共生」について研究されている横浜国立大学教授の梅澤先生の指導の下、自己の課題に合わせた練習の場を工夫し、自己の成長を感じさせる授業展開であった。「もっと高く跳びたい」と考えた生徒のグループは、サッカーのコナーフラッグを高く掲げてタッチするなど、用具をうまく使って練習方法を考えていた。特に興味深かったのは、陸上分野でありながら記録会を位置付けないという単元構成であり、私自身、保健体育科の目指す姿について改めて考えさせられるものであった。



〈令和6年度京都教育大学附属京都小中学校の実践〉

研究主題「義務教育9年間で資質・能力を育成するための教育課程の再構築に関する研究開発：文部科学省研究開発学校（延長指定第2年次）」の下、チップ・ウッド氏著『成長のものさし』による認知領域を参考に、11歳（5年生）と14歳（8年生：中学2年）の境目を「学びの質が変わるとき」と踏まえ「4年－3年－2年」の区分を独自に設

け、様々な行事での学びをつなぎ学校教育に生かしていた。特に興味深かったのは「生活科・総合的な学習」を中核においた資質・能力ベースのカリキュラムを組み、身に付けたい力の8項目を3領域に合わせて各教科で研究を進めている点である。

学びに向かう力、人間性等
・リーダーシップ ・チームワーク ・社会参画性 ・自己コントロール力
思考力、判断力、表現力等
・批判的思考力 ・創造的思考力 ・論理的思考力 ・コミュニケーション能力
知識及び技能
・各教科の内容 ・各領域の内容

これらを育成するため、保健体育科の位置付けとしてどのような授業が実践されているか参観した。

○単元：第2学年/マット運動

○単元でフォーカスした資質・能力

「自己コントロール力」・「コミュニケーション力」

授業者は度々「よいコーチング」について生徒に伝え、「みる」視点の育成が上記に挙げた資質・能力の向上につながると考えていた。また、ワークシートには各技のポイントが記されており、知識・技能を高めるためでありながら、自己コントロール力やコミュニケーション力を養うためのツールとして位置付けていたのが印象的であった。



〈令和7年度全国学校体育研究大会 北海道大会〉

○シンポジウム内容

「子供たちが保健体育を学ぶ意義や価値を見出すことのできる学習指導の工夫」

コーディネーター：東京学芸大学教授 鈴木 聡先生
シンポジスト

札幌市教育委員会指導主事 河本岳哉先生

大阪府高槻市立冠中学校 校長 岩佐知美先生

鹿児島市立鹿児島女子高等学校 教諭 中拂真知子先生

○内容

「卒業後も運動を楽しみたい」「大人になっても健康でいたい」このような児童生徒の姿を実現させるためには、自己のよさや成長を実感させる学習評価の在り方や領域固有の技能取得にとどまらず、実生活との関連を意識した学習指導の工夫が大切であると議論されていた。

〈終わりに〉

「保健体育科で何を学ばせるか」という大きな概念的問いは、我々教員の中で答えをもっておかなければならない。教科のみで完結するのではなく、横断的に資質・能力を育成する視点も大いに取り入れるべきだろう。昨今の情勢に耳を傾けつつ、保健体育科教員として「移りつつ変わらざるもの」について考え続けていきたい。